

令和6年 釧路市新年交礼会 年頭の挨拶

新年明けましておめでとうございます。謹んで新春のお慶びを申し上げます。

本日は、このように大勢の皆様のご出席を賜り、釧路市新年交礼会を開催できますことに厚く御礼申し上げます。

今年も、衆議院議員・伊東良孝先生、鈴木貴子先生、参議院議員・鈴木宗男先生にご臨席を賜っております。

そして、後ほどご紹介させていただきます北海道議会議員の皆様、ご多用の中、誠にありがとうございます。

先生方には国政・道政の中で「ふるさと釧路」の発展のため、日々ご尽力をいただいております。心から感謝を申し上げます次第でございます。

冒頭、1月1日、16時10分に発生し、最大震度7を記録した令和6年能登半島地震の被害状況は、連日、報道されているとおりであり、発生から72時間以上が経過した現在も、厳しい条件のもと、懸命の救助活動が続けられております。

被害に遭われた皆様に衷心よりお見舞いを申し上げますとともに、犠牲になられた方々のご遺族の皆様に深くお悔やみを申し上げます次第であります。

また、被災地におきまして、昼夜を問わず被災者の救助に全力を尽くしておられる関係者の皆様にも深く敬意を表するところであり、日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震の発生が想定されている釧路市といたしましても、北海道と連携し、必要な支援を行うとともに、改めて、対策・備えの確認・点検等を行ってまいり所存です。

さて、新型コロナウイルス感染症が5類へ移行し、様々な場面で社会経済活動が正常化に向かう動きが加速する一方、一昨年から続く世界的な物価高騰は恒常化の様子が見受けられるほか、今回の巨大地震の発生など、常に新たな課題への対応が求められる状況が続いております。

気象面でも、昨年は、例年になく暑さが続き、8月24日には釧路・根室地方で初めてとなる熱中症警戒アラートが発表され、学校の体育や部活動を中止するなど、これまで涼しさをセールスポイントとしてきた釧路市でも、対策が必要な状況となっております。

こうした状況の中でも、昨年は、アジア地域で初めてとなる「アドベンチャートラベル・ワールドサミット（ATWS）2023」の開催、更には姉妹都市である鳥取市・湯沢市との交流や台湾・ベトナムとの交流など、国内外から釧路にご縁をいただいた方々との交流が盛んになった1年でもありました。

9月に札幌市で開催されたATWSでは、64の国と地域から約770名の方が参加され、サミット終了後には、体験型見学会「ポストサミットアドベンチャー」が釧路エリアを含む道内4地域で開催されるなど、世界に向けてこのエリアの魅力を発信することができました。今後は、欧米豪を中心とするAT関係者とのネットワークを生かした

がら、ATが地域の稼ぐ力として根付くよう、しっかりと取組を進めてまいりたいと考えております。

また、姉妹都市締結から60周年を迎えた鳥取市・湯沢市との交流では、釧路市議会姉妹都市等交流促進議員連盟などの皆様と共に、8月と10月に相互訪問を行い、改めて両市との歴史的・文化的なつながりを深めたところであります。

11月の台湾・ベトナム訪問では、台湾の航空関係機関や北陽高校の見学旅行先である私立景文高級中学、台北市立動物園との学術交流などで親交の深い「台北市文山区」を訪問するとともに、ベトナムでは「北海道フェスティバル in ハロン」に参加するほか、ハノイにある石炭鉱物工業グループ・ビナコミンを訪問するなど、更なる友好関係を築いてまいりました。

今回の台湾訪問後には、チャイナエアラインが、1月26日から2月11日までの釧路・台北間チャーター便、5往復8便の運航を決定いただくという成果も得られたところであります。

これら最近の世界規模の流れを受け止める中で、国際基準で物事を俯瞰し、情報を発信していくことの重要性を感じたところであります。

特にATWSでは、日本全体の中でひがし北海道が注目され、評価を受けたのは、2つの国立公園をはじめとする自然景観の素晴らしさはもちろんのこと、この豊かな自然環境を人々が保全してきた歩み・ストーリーでありました。

「阿寒湖のマリモ」や「タンチョウ」といった特別天然記念物を、指定以前から地域の人々が保護活動を展開し、絶滅の危機から回復した取組や、野生生物保護センター並びに猛禽類医学研究所と共に、野生生物の生息環境を改善する「環境治療」の取組は、まちづくりに「環境」を掲げる釧路市独自のストーリーであります。

昨年5月には、「阿寒湖と周辺地域」の世界自然遺産登録を目指す活動の中で、若菜さんを中心とする研究グループが長年研究を続けてきた「阿寒カルデラ湖沼群」の類い稀な生態系が、オランダの科学誌への論文掲載により、明らかにされたところであります。

今後におきましては、これら釧路市が当然のように行ってきたストーリーを世界に向け、しっかりと発信するとともに、今年、国立公園指定90周年を迎える阿寒摩周国立公園につきましては、ユネスコのエコパークやジオパークのような、人々と自然が共生してきたこれまでの取組を生かす方策の検討も進めてまいります。

天賦の大自然からの恵みという視点では、今年の釧路港の水揚げ量が、主にイワシの豊漁により18万トンを超え、32年ぶりの日本一となりました。かつては13年連続を含む22回の日本一を記録した水産都市釧路であります。年内には、衛生管理に対応した第8魚揚場も完成予定であり、現在、実証実験が行われている海面・陸上養殖の取組と併せて、食の安全安心や高付加価値化といった自然の恵みをまちづくりに生かす取組を漁業関係者の皆様と連携して進めてまいります。

さて、昨年末に発表された国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口では、北海道の2050年の人口は、2020年比で26%減の382万人となり、釧路市も10万人を割るとの推計が発表されたところであります。

人口減少は社会課題・地域課題として大きく受け止めながらも、その対策は、国並びに都会と地方では異なる部分があることを私はこれまで申し上げてきました。

国並びに都会では、出生率が上昇し、子どもの数が増えれば人口増につながる自然減対策がメインになるものの、地方都市では、子どもたちが一定の年齢になれば都会に出ていってしまう社会構造から、自然減少対策に併せ、社会減少対策も必要になっております。

その社会減少対策が、若い世代がこの釧路市で生活する、働くことを主眼として、仕事・雇用を創ることが、将来に向けた人口減少対策の重要施策と考えております。

その一つには、開設以来、多くの雇用を生み出し、事業者を側面支援してきたk-Bizは、昨年8月で5周年を迎え、その成果も含め今や釧路市の産業支援において、欠かせない存在となっております。

この他、経済の活性化、教育などの人材育成、産業基盤の整備、働きやすい環境づくりのための子育て支援などに重点的に投資し、このまちの未来に繋げてまいりたいと考えております。

令和6年度には、いよいよ阿寒IC～釧路西ICの開通が予定されており、物流をはじめ、生活圏内での移動や道央圏との移動時間の短縮が図られるなど、様々な面において、利便性の向上が期待されるところです。

JR釧路駅の高架化を想定した都心部再整備につきましては、新年度は、都心部まちづくり計画の事業計画編を策定し、空間デザインのイメージ共有を図ります。また、駅から北大通、リバーサイドへとつながる中心市街地のにぎわいを創出するため、それぞれの視点で市民の皆様からご意見をいただくワークショップなど開催しており、皆様と議論していく中で、車中心から人中心へという基本的な考え方を分かりやすく示してまいりたいと考えております。

防災面では、昨年、策定した「津波避難対策緊急事業計画」に基づき、津波避難困難地域である大楽毛地区に避難施設を備えた複合施設の整備を進めるほか、大楽毛地区と音別地区に一時避難場所の役割を果たす津波避難タワーの整備に向けた検討を進めており、東日本大震災や今回の令和6年能登半島地震を教訓とし、厳冬期の避難対策などの推進とともに、市民の皆様の生命と財産を守るため、強くしなやかなまちづくりにしっかりと取り組んでまいります。

先の見えない時代であるからこそ、課題や向かうべき目標を皆様としっかり共有し、同じ方向に向かって力を合わせていくことが重要であると考えており、市民の皆様との信頼や「つながり」がわがまち釧路の未来へとつながるものと確信しております。

本日ご参会の皆様、そして、市民の皆様のなお一層のご支援とご協力をお願い申し上げますとともに、今年一年が皆様にとりまして、実りある素晴らしい年となりますよう心から祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。